

特集

教科書を活用して 「やり取り」の指導を深めよう

巻頭エッセイ

表紙裏 化石は未来を語るか? 矢部 淳

特集

教科書を活用して「やり取り」の指導を深めよう

- 01 教科書を活用した持続可能なやり取りの指導と評価 奥住 桂
- 04 教科書を活用したやり取りの質を高める段階的指導 中島 真紀子
- 06 単語から文へ、質問から対話へ—教科書プロジェクトで育てる発表後のQ&A— 中田 未来

連載

- 08 実践 NEW CROWN ーわたしの授業紹介ー 島田 拓
- 10 英語教師のための基礎講座 生徒のニーズを活かす英語授業③ Impromptu Speech Cardsを用いた実践 日基 滋之
- 11 Essay Loanwords and Language Learning David Allen
- 11 リクツで納得! 学校英文法の「文法」 自他をつなぐ補完法 亘理 陽一
- 12 明日の授業と評価をブラッシュアップするQ&A 今井 裕之
- 13 TEN通信 教科書アンケート結果のお知らせ

化石は未来を語るか？

矢部 淳

植物化石は、過去の記録にとどまらない。

5回の大量絶滅が植物相に刻んだ痕跡は、次の大量絶滅へのヒントを与えてくれる。



国立科学博物館 生命史研究部 進化古生物研究グループ長。専門は新生代と中生代後期の大型植物化石。国立科学博物館特別展「大絶滅展—生命史のビッグファイブ」の総合監修を務める。著作に『化石が語る植物の進化 5億年史』（丸善出版）などがある。

私は、人類が現れるよりもはるか前、「地質時代」の植物を研究している。植物自体の進化はもちろん、その背景にある環境変化や大地の変動との関わり、最近では周囲の動物たちとのインタラクション（相互作用）にも興味を持っている。対象とするのはいわゆる「化石」だ。一般には閉じたような、マニアックな印象があるかもしれないが、どうしてどうして、国際的な視点とコミュニケーションが重要な分野である。

例えば、「生きている化石」として知られるメタセコイア。ヒノキ科の針葉樹で、公園や学校の校庭などで馴染みがある樹木だが、この植物は、実は日本では60万年ほど前に絶滅した。メタセコイアはスギ科（当時）の絶滅属として1941年、日本人研究者によって「発見」された。当時は世界から絶滅した植物だと考えられたが、1946年、メタセコイアの生き残りが中国四川省で発見されると、それを重く見たアメリカ人研究者の手により、日本を含めた世界各地に頒布された。

化石を調べると、この植物はかつて北半球に広く分布していたことがわかる。最も古いものは、1億年前、恐竜がいた中生代白亜紀にまで遡る。白亜紀という時代は温暖で両極域に氷がなく、さらに北米とユーラシア大陸が繋がっていたため、メタセコイアは大陸間で分布を広げることができた。この温暖な状況は若干の変化を伴いながら新生代に継続したため、北極圏には広大なメタセコイアの森が広がっていたことが各地の化石林からわかっている。しかし、5000万年前以降、気

候の急激な寒冷化と乾燥化によって、メタセコイアは分布を縮小した。この環境変化は、もともと南半球にあったインド亜大陸がユーラシア大陸に衝突してヒマラヤ山脈を形成し始めたことや、アフリカ大陸や南米大陸の北上で南極大陸が独立し、それを取り巻く海流が成立したことで、南極大陸が寒冷化し、世界中を冷やしていったことも間接的に関わっている。

こうした事例からわかるように、生物の歴史を知るには、多くの場合、日本だけでなく、世界の事情を知る必要がある。化石研究は、現在の生物を調べる研究者からはとすると怪しいと見られることがあるが、生物の今は長い歴史の産物なのだから、今の生き物だけを見ていてはわからないこともあることは意識しておきたい。

とはいえ、私たちの暮らしにどれだけ関わるかということ、そこは「知的好奇心」と答えるわけだが、地質時代の記録の中にも、私たちの暮らしと決して無関係でない現象は少なからずある。その一つが「大量絶滅事変」だ。大量絶滅事変とは、ある時代の生物種全体の70%とか80%もが絶滅した現象で、これま

でに幾度もあったと言われている。中でも規模の大きな5回の事変が「ビッグファイブ」だ。極めて大規模な火山活動や、小天体の衝突といった地球内外の現象が起因して起こったとされるビッグファイブでは、多くの生物種が死滅したことで、生き残った種にとって進化の場が生まれ、その後の生物相の爆発的な多様化に繋がったと考えられている。

興味深いことに、各大量絶滅の植物への影響は、それが大きかった時期と、そうでもなかった時期があった。例えば、よく知られる恐竜の絶滅期は植物への影響がさほど大きくなかったのに対し、最大の絶滅イベントと言われる古生代／中生代境界期では、湿地にあった大規模なシダ類の森がほとんど消滅し、現代につながる種子植物の森へと大転換した。

まさにいま、我々人類の活動がきっかけとなって起こっているとされる「第6の大量絶滅」。過去の大量絶滅事変を調べることが、次の大量絶滅にどう向き合うのかのヒントを与えてくれるのではないだろうか。



メタセコイア樹幹の化石 約200万年前、東京都八王子産。（国立科学博物館所蔵）



研究室の様子

教科書を活用して 「やり取り」の指導を深めよう

現行の指導要領下で4技能5領域の育成が求められるようになり、
学校現場でも話すこと[やり取り]の言語活動が活発に行われるようになりました。
生徒にたくさん話してもらいたいという思いの一方、教科書本文と一貫して指導することや、
段階的に生徒の力を伸ばすことに課題を感じている先生もいらっしゃるかもしれません。
本特集では、奥住 桂先生に教科書本文とやり取りの活動を関連付ける方法や、
評価方法について解説いただきます。
また、実践例として、中島 真紀子先生に授業内で継続的にやり取りの指導を組み込む方法を、
中田 未来先生に学年や生徒の英語力に合わせた支援の方法をご紹介します。

01 教科書を活用した持続可能なやり取りの指導と評価 奥住 桂

04 教科書を活用したやり取りの質を高める段階的指導 中島 真紀子

06 単語から文へ、質問から対話へー教科書プロジェクトで育てる発表後のQ&Aー 中田 未来

教科書を活用した 持続可能なやり取りの指導と評価

奥住 桂(埼玉大学)

はじめに

現行の学習指導要領への改訂の中で、「話すこと」の指導が「やり取り」と「発表」に分けられた背景には、それまでの「話すこと」の指導・評価が、スピーチやスキットなどのように予め準備した原稿を暗記して読み上げるものに偏っていて、即興的な対話の指導が十分でなかったという状況があったのだと思います。

その後、即興的なやり取りを授業内に組み込む先生が増えたと感じています。私が最近参観した授業でも、授業冒頭にSmall Talkという形で生徒同士で特定の話題について語りあう活動が設定されていました。取り上げる話題も、「先週の日曜日にやったこと」といっ

た日常的なものから、「無人島に持って行くな？」といった理由を添えて意見を述べるようなものまで多様です。

授業の中で、たとえ拙くても生徒が今持っている英語力を総動員して一生懸命に語る姿が広く見られるようになったことは大変よいことだと思います。一方で、活動中にあまり発話ができない生徒がいたり、毎回同じような話をしていて成長が実感できない生徒や、生徒が成長していることを実感できない先生もいたり、やり取りの指導の具体的な課題も見えてきました。本稿では、生徒が楽しく活動に参加でき、先生方が今後も無理なく継続的にやり取りの指導に取り組んでいけるような、効果的な題材選びと評価のポイントを考えます。

Small Talkと教科書を連動させる

Small Talk等の活動の成否は、生徒たちの興味関心を引き、なおかつ生徒たちの熟達度にちょうどいい話題を設定できるかどうかにかかっています。広く使用されている話題はあると思いますが、他の学校やクラスでうまくいったからといって、自分の教室でも機能するとは限りません。生徒の熟達度や、これまでの学習経験、地域性などが変われば反応は大きく変わります。ですので、これは先生方が目の前の生徒に合っていると考えた話題を投げ込んでみて、生徒の反応を見ながら微調整していくしかありません。その意味では、短時間で継続的に取り組むSmall Talkという枠組みには、あまり盛り上がらなかった回があったとしても次の機会に修正をして取り組めるという利点があります。

もちろん、いつも馴染みのある話しやすい話題でばかり話していてもやり取りの力は伸びませんので、時折（あるいは段階的に）難しい話題にも挑戦させてあげたいところです。ただ、「社会的な話題」のように難易度が上がると、先生方も「事前に必要な語彙を導入しなくては」と考え活動時間が長くなってしまったり、生徒も語彙を覚えるだけで必死になってしまったりと課題点も多くなります。

こういった課題を解決するための一つの手段は、Small Talkと教科書を連動させることです。単純に、教科書のレッスンで登場した話題を用いることで、既習の語彙がそのまま使えます。特に名詞や動詞、形容詞などの「内容語」は、話題が変われば会話内で使用される語彙も大きく変わります。その話題に関連する内容語がある程度学習済みであれば、生徒はメッセージを伝える方法（統語的な工夫）にエネルギーを注ぐことができます。

教科書と連動するという場合に、学習済みの文法事項が生きるような話題設定をする方法もあると思いますが、あまり文法に意識が向かいすぎると、「その文法を使用して話さないといけないのではないか」と生徒に付度させてしまう可能性があります。そのため、特定の文法定着をねらうというより、幅広く様々な文法事項にアクセスさせる機会を提供するほうを意識した方がよいと私は考えます。その意味では、語彙も文法もちょっと遠い記憶になりつつある、少し前に学習した（あるいは過年度の）レッスンに連動したSmall Talkを設定するのもよいかもしれません。

教科書と「連動」といっても、連動のさせ方にはいろいろなバリエーションがあると思います。NEW CROWN（以下NC）1年生のLesson 4で「夏休みの予定」について扱ったので、生徒たちの夏休みについて話してもらおう、というのは直接的なつながり方です。このように、毎回生徒自身のリアルな話をしてもらおうのもよいのですが、せっかく教科書の中に魅力的なキャラクターが登場しているので、それらのキャラクター（立場）を利用するという間接的な連動方法もあります。

NC2年生のLesson 3は「職場体験」が話題になっていますが、ここでどこに職場体験に行くか決めかねている花が登場します。ペアのうち一人は悩める花になって、もう一人がおすすめの職場体験

先をアドバイスするといったロールプレイ的な活動にアレンジすることも可能です。教科書本文から花の性格を自由に想像してみると、「もしかして優柔不断?」「何にでも興味を持つ好奇心旺盛で積極的な子?」といった「文脈」が生まれるので、それに沿ったアドバイスをすることができます。なにも文脈がないと、どんなアドバイスでもいいことになるので、逆に何を話すべきか生徒が決められない、ということがよく起こります。こういう文脈こそが、まさに「コミュニケーションを行う目的・場面・状況」と言えるでしょう。

この活動では花の学校の行事という「架空」の設定をベースにしつつ、アドバイスの中では生徒の近隣のお店の名前を出すなどの「リアル」な情報を取り入れることができます。教科書では、日本の中学生が体験しそうな学校行事などが話題として取り上げられていますが、もちろんすべての学校で「職場体験」という行事が実施されているわけではありません。それでも、こうしてロールプレイと組み合わせることで、半分架空で半分はリアルというほどよい距離感を持った活動にすることができます。本特集で紹介されている他の実践例なども参考にして、ぜひいろいろな工夫をしてみてくださいとよいと思います。

発達を見取る共通の「ものさし」を持つ

「話すこと [やり取り]」の指導で思い浮かぶもうひとつの課題は、評価です。実際にパフォーマンス・テストをするとすると、ペアで話している様子を評価することになりますが、あまり話せなかった生徒もペアの相手が違ったらもっと話したかもしれない、という可能性はあるでしょう。対話は相互作用ですから当然です。ペアを替えて複数回実施するのが理想ですが、そう何回も実施する余裕がないことが多いのが現実です。

私がかつて実施していたのは、ALTとの一対一での対話テストです。対話の片方を熟達した英語話者にすることで、ペアの組み合わせによる不公平を是正することができます。ALTが「壁」になって、みんながそれぞれその「壁」にボールを打ち込みながら「壁打ち」をするイメージです。

この形式自体は広く実施されていると思いますが、ふつうに実施してしまうと、ALTが質問して生徒は答えるだけ、という形になりがちで、対話を進めていく力が生徒についているかわかりにくいという課題があります。そこで私は「聞き上手検定」と銘打って、ALTに話し手になってもらい、生徒がALTから話を引き出す、というタスクを課しました。ALTの話の流れに合わせて、生徒が質問をして話を深めたり、次の話を引き出したりすることが求められます。このように、英語の「正確さ」だけでなく「適切さ」が測られるようなパフォーマンス・テストも広がっていくといいと思います。

さて、やり取り（に限りませんが）のパフォーマンスを評価する上で考えなければならないもう一つの点は、パフォーマンスの何を評価するのかという「評価規準」をどうするかということです。発音から文法から発話の量まで、あらゆることを一度に評価しようとして

先生が苦しくなってしまうたり、生徒も評価を気にしすぎて気持ちよく発話ができなくなってしまう可能性もあります。

その意味で、評価のポイントを絞るということが重要です。知識・技能の観点で評価するのであれば、例えば「動詞の過去形が正確に使えたかどうか」といった一つの規準のみを評価すればよいと思います。そのパフォーマンスの中では、正しくない発音も、言いどきみもあるかもしれませんが、あるポイントをクリアしていれば今回のパフォーマンス・テストとしてはA評価とする、という思い切りが必要です。もちろん、その上でもっとこういうところをよくするといいいよ、というフィードバックをすることは問題ないと思います。

思考・判断・表現の観点でいえば、前出の「聞き上手検定」のように、「ある目的を達成するために適切に言語使用ができたかどうか」、言い換えれば「言語使用を通してある目的を達成できたかどうか」に絞って評価をしてあげれば、すっきりします。あれもこれも求めるより、一点突破にしてあげることで、パフォーマンスを終えたときに生徒自身が「できた!」「できなかった!悔しい!」と判断できるような課題だと、生徒にとって授業や家庭での練習段階から取り組みやすいものになると思います。

ここまで、いくつかの「評価規準」の例を示しましたが、こういった規準が先生方の中で十分に共有されていないという点も大きな課題です。流ちょうさや発話の量にこだわる先生から、発話中の文法的な正確性にこだわる先生まで、多岐にわたります。もちろん、そういった観点が生徒としっかり共有されていて、日頃の授業からそういった点について指導がされているのであれば、それ自体に問題はありません。ただ、進級や進学をして担当する英語教師が変わる度に違うことを求められるのも生徒たちが大変です。どの段階の学習者にも共通する評価のポイントが共有されていくとよいと考えています。

例として本稿でお示しするのは、基本的な語順の定着と名詞句の発達です。田地野(2021)は「だれが」「する(です)」「だれ・なに」「どこ」「いつ」という平易な用語で英語の基本的な語順を示す「意味順」(意味のまとまりの順番)という枠組みを提示しています。小・中学校の段階であれば、まずはこの「意味順」を守りながら話せるようになることが目標でよいと思います。三単現のsや進行形の形態にささやかな誤りがあっても、即興で産出されるやり取りの指導・評価の場面では気にしすぎる必要はありません。

一方で、中学校3年生から高校生くらいの段階になったら、「だれが」や「だれ・なに」の場所でいつまでもsoccerやmathのような1語の名詞を使用しているのではなく、books about animalsとかa lot of people who lived thereといった長い名詞句を使用できるようになっていくことこそ、成長と言えるでしょう。そして、そういった点での成長は、教科書で扱っている単元や授業内の活動にそれほど影響を受けないので、過去の自分と比較が可能です。継続的にSmall Talkなどのやり取りの活動に取り組む中で、教師も生徒自身も共通認識のもと、成長を目指していけるポイントになると思います。

「話すこと」を総合的に育む

本稿ではここまで、「話すこと [やり取り]」の指導と評価について、ポイントをお示してきました。しかし、やり取りの指導はやり取りだけやっていれば高まるわけではありません。

そもそも、[やり取り]と[発表]は多様な「話すこと」の活動の一部に過ぎません。図のように、「話すこと」を「即興か準備ありか」「1人でやるか2人以上でやるか」という2軸で分類すると、[やり取り]にも[発表]にも分類されないエリアがあることに気づきます。

	impromptu (即興)	prepared (準備あり)
1人	A	B 発表
2人以上	C やり取り	D

A(1人でやる、即興的な活動)には、「メモだけを見て話す」「ピクチャー・テリング」「リテリング」といった活動が当てはまります。一方、D(2人以上でやる準備ありの活動)には、「群読」「スキット」「英語劇」などが当てはまります。

こういった活動は、一般的な[やり取り]や[発表]には分類されない可能性があるため、現行の学習指導要領での位置づけが微妙です。それでも、実際に教室ではこれまでよく取り組まれていた活動だと思いますし、こういった活動を経由して、1人で[発表]したり、即興で[やり取り]をしたりできるようになるのだと思います。最終的にやり取りの力を伸ばすために、多様な「話すこと」の指導に取り組んでいくことが大事だと思います。

おわりに

本稿では、生徒全員がいつも持っている教科書をやり取りの指導にも最大限に活用すること、そして評価の観点を毎回新たに考えるのではなく継続性のあるものにすること、の二つをご提案しました。やり取りの指導を「やらなきゃ」「やりたい」と感じている先生方は多いと思いますので、次ページ以降の実践事例も含めて本特集が、そんな先生方の背中を押して、今後さらに多様なやり取りの実践事例が集まっていくことを願っています。



奥住 桂

・埼玉大学 教育学部 准教授
・専門分野は、教育英文法・教員養成・教員研修
・埼玉県内公立中学校の英語科教諭などを経て現職

教科書を活用した やり取りの質を高める段階的指導

中島 真紀子
(筑波大学附属中学校)



生徒のやり取りの力を伸ばすためには、単に英語を話す機会を増やすだけでなく、やり取りの内容や表現を少しずつ豊かにする、その質を高めていく、という視点が重要です。しかし、実際の授業では、やり取りが短い応答で終わってしまったり、学習した表現が十分に活用されなかったりすることも少なくありません。

そこで本稿では、教科書を内容理解の教材としてだけでなく、「やり取りを生み出す教材」として活用する指導法を紹介します。レッスンの題材や本文と関連付けた活動を通して、生徒が既習の語彙や表現をくり返し活用しながら、自分の考えを伝え合う力を育み、生徒のやり取りの量と質とを段階的に増やし、高め、より豊かなコミュニケーションにつなげていくことを目指します。

指導例 NEW CROWN 3 Lesson 2 “The Power of Music”

■やり取りを継続し、発話の質を向上させていくための工夫

- ①教科書で学んだことを活用できるように、教科書のテーマと関連したテーマでやり取りを積み上げていく。
- ②生徒の発達段階に応じ、生徒が「話したい!」「話せる!」と思えるトピックを設定する。
- ③やり取りの型やストラテジー、表現等を習熟度に合わせて段階的にインプットしていく。
- ④継続的にやり取り・意見交換の活動を授業に取り入れる。

この単元はタイトルの通り音楽が題材であるため、授業の導入では音楽に関するトピックでやり取りを行います。

レッスンの本文に入ってから、その内容と関連付けたトピックで、継続的にやり取りや意見交換の活動を授業に取り入れます。また、回数を重ねるごとに質が高まっていくよう、AIを効果的に活用して自分の表現を見直したり、教科書で学んだ表現を積極的に活用して話したりすることができる場面を設定します。

■「やり取り」に関する目標

音楽というテーマを通して、話し相手とよりよい関係を築くために、わからないところを確認したり聞き返したりしながら、即興で伝え合ったり、質問に応答したりすることができる。

1時間め【Lesson 2の導入+Part 1の導入】

Q①. Do you like music?

Q②. Which song do you want to play? Why?

初回の授業なので、①のようなシンプルなトピックから、レッスン

を通して帯活動的にやり取りの活動を実施していきます。本課に登場する“Shake It Off”と“Count on Me”を本文導入前に鑑賞し、曲や歌詞の内容を理解した上で、Part 1 Scene 1, 2本文の内容理解に進みます。本文の内容を踏まえ、生徒が「話したい!」「話せる!」と思えるよう、生徒自身もバンドメンバーの一員であるという教科書に紐づけた設定で、②のテーマで意見交換を行います。また、Why?、Tell me more. など会話を継続するための声掛けを常に教師側から行うことで、アウトプットを促します。

2時間め【Part 1の復習】

Q①. Do you play any musical instruments?

Q②. Which song do you want to play? Why?

Scene 2本文の復習を行ったあと、前時と同じ②のテーマで再度意見交換を行います。本文の内容理解が深まったことで、生徒の意見が変わることも想定されるため、同じトピックでのやり取りをくり返すことも効果的です。また、流ちょうさや質の向上も期待できます。本文の中から“sound like ...”や“move the audience”などの有用な表現を取り上げ、やり取りの中での活用も促します。口頭で意見を述べたあと、文字に起こしAIに修正を依頼し、自分の表現を見直す機会をつくります（事前にAI活用の留意点を生徒と共有しておきます）。

3時間め【発展活動】

発展活動として、文化祭で演奏する曲を選ぶ過程にメンバーとして参加するという設定で、意見交換を行います。

Q. If you were a member of the band, what music would you like to play?

What music do you want to play at the school festival?
Why?
Don't forget that our school festival's theme is "kizuna".

Two weeks ago,
Riku sent this card to everyone in his band.
You are a member of the band.
Answer the question on the card.

実際に使用したスライドの例

【発展活動の流れ】

①実際に、上記の陸の質問に答えるかたちで自分の意見を学習支援ツール（ロイロノート）のカードに書き込み、提出する。

※この段階では、歌の種類に制限をかけず、自由に書かせます。まずは自分のノートに手書きで書かせ、その後AIに修正を依頼し、

改めて学習支援ツールのカードに書き込ませます。カードに書かれたものがディスカッションのための重要なインプットとなるため、この時点でできる限り内容のチェックをしていきます。

I want to perform "Stand By Me" at the school festival, because its lyrics match our theme "kizuna". "Count on me" is also fits the theme, but "Stand By Me" is more upbeat so it will make the audience excited. 5月7日(木) 14:38	I think we should play "Kiseki". It is a song about kizuna, or bonds. I think many people have sung this song at least once, so the audience can sing along with us. Also, the lyrics will move the audience. 5月7日(木) 14:40	I think we should play Try Everything because it is a fun song with a good rhythm. The lyrics are also nice, so I think we can move the audience. And we can sing along, so we can feel unity every one! 5月7日(木) 14:41
I think we should play "Stand by me" at the school festival. Our school festival is "Kizuna", so I want to choose a song with lyrics about friendship. Many students have watched the movie "Stand by me", so they know the story. The song will make everyone happy and help us enjoy the festival. Also, the melody is easy to listen. I think it is perfect for our festival. 5月7日(木) 14:44	I want to play Peace Sign by Kenshi Yonezu. This song is fun and exciting, so many students like it. Also, many students know this song, so we can enjoy it together. Our school festival theme is kizuna, which means bonds. I think this song is good because it helps us feel connected. 5月7日(木) 14:44	I want to sing "Kiseki" by Glee because the song is very famous in Japan. It's a love and friendship song, and everyone can sing easily. So I think everyone can sing along. Also, we can learn that time is precious from the lyrics. 5月7日(木) 14:44
I recommend the song "Stand by Me". I have two reasons. First, we have sung it in our English class before, so everyone can sing along. Second, this song is good for the theme of our school festival, "Kizuna" because it's the theme song of the movie "Stand by Me". It is a story about friendship. So we should sing this song. 5月7日(木) 14:45	I want to play "Bokurumata" by SG. This song is about saying "good bye" and meeting again in the future. It matches the theme "kizuna" because it represent the connection between people. Also, it is a good song for a band performance. 5月7日(木) 14:45	I want to recommend a song to you. It is "Tomoyo" by Ketsumeishi, and it has a strong theme of friendship. The song talks about how friends support each other no matter what happens, and how important it is to stay connected. The melody feels warm and powerful, and the lyrics make you think about the friends you are proud of. When you listen to it, I think you will remember the people who always stay by your side. I hope this song touches your heart like it. 5月7日(木) 14:45

実際の「意見の共有」の例

- ②クラス全員の意見を読み、各自が1曲に絞る。
- ③4人グループのディスカッションで合意を得て、1曲に絞る。
※やり取りをするときの人数は、ペアや3～4人のグループ等、トピックや活動の意図によって変化させるとよいでしょう。
- ④4人グループのリーダーがグループの意見を発表する。
- ⑤クラス全体のディスカッションで合意を得て、クラスとしての1曲に絞る。

4時間め以降

4時間め以降も、教科書の内容理解と併せて、本文の内容と関連付けたテーマでやり取りや発展活動を行っています。Part 2以降では、“Count on Me”や、授業で取り入れ、歌っている“Fight Song” (Rachel Platten) を題材に、曲の背景を共有しながら、Does listening to music make you happy?、What song makes you happy?、Tell me what you know about “Count on Me.”などの問いを使い、自分の考えを伝え合う活動を行うほか、Goal Activityのモデル文から、歌の特徴やそのよさを説明する表現を習得してから、単元末の曲紹介の活動へとつなげます。

レッスン末には、Do you think that music has the power to make people happy? という問いについて意見交換を行い、音楽が人に与える力について考えを深めます。音楽という1つのテーマの中でも、特定の曲や音楽の役割について考えたり、多様な視点から話題を広げながら、同じテーマに何度も戻ってやり取りを重ねることで、発話量を増やし、理由や具体例を加えながら、表現の質を少しずつ高めていくことをねらいとしています。

実践を通して見られた変化

本レッスンでは、スモールトークでの簡単なやり取りから意見交

換、そして曲紹介の活動へと段階的に発展させながら、生徒のやり取りの質の向上を目指しました。

やり取りの力を育成するためには、単に英語を話す機会を増やすだけでは十分ではなく、同じ題材や問いについてくり返し考え、伝え合う中で、既習の語彙や表現を活用しながら、自分の考えをより分かりやすく伝えようとする経験を積み重ねていくことが重要です。そのため、Which song do you want to play?、Do you think that music has the power to make people happy? など、教科書の内容と関連した問いをくり返し扱い、自分の話したことをよりよいものにブラッシュアップしてから、意見交換を継続的に行いました。その結果、生徒は回数を重ねるごとに発話量が増え、理由や具体例を付け加え、さらには流ちょうさや正確さに留意して話す姿が見られるようになりました。

また、教科書本文の内容理解とやり取りを往還させることで、本文で学んだ語彙や表現を実際のコミュニケーションの中で活用する機会を多く設定しました。本文を単なる音読練習や文法導入の材料として終わらせるのではなく、やり取りの題材としてくり返し活用することで、生徒は既習事項を実際のコミュニケーションの中で使う機会を得ることができ、やり取りの質の向上につながるのだと改めて感じました。

さらに、AIを活用し、自分の考えを英語で表現したあとに見直す機会を設け、生徒はAIによる修正結果を参考にしながら、自分の表現と比較し、より適切な表現へと改善する経験を積むことができました。しかし、AIによる提案をそのまま受け入れるのではなく、生徒自身が表現の違いや改善点を考えながら主体的に活用できるよう、指導の在り方をさらに検討していく必要があります。

一方で、音楽のように生徒にとって身近なテーマは意見交換が活発になりやすいですが、すべての生徒が同じ興味・関心をもっているわけではありません。より多くの生徒が自分ごととして考え、参加したくなるテーマや場面をどのように設定するか、また興味の薄い生徒も既習事項を活用しながらやり取りに参加できるよう、問いの工夫や選択肢の提示の仕方などについても工夫が必要です。

■おわりに

やり取りの質の向上は、1時間の授業だけで実現できるものではなく、スモールトークや意見交換を継続的に行っていく必要があります。その際に、教科書の内容と関連付けて既習事項をくり返し活用する場面を計画的に設定していくことが大切です。教科書を核としながら、理解する活動と伝え合う活動を行き来することで、生徒は自分の考えを英語で伝える力を少しずつ高めていくことができます。

今後も、教科書を「やり取りを生み出す教材」として積極的に活用し、生徒が英語で伝え合うことの楽しさや達成感を味わえる授業づくりを目指していきたいと思います。

単語から文へ、質問から対話へ

—教科書プロジェクトで育てる発表後のQ&A—

中田 未来
(守口市立八雲中学校)



はじめに

教科書のプロジェクト活動では、生徒が自分の考えを発表したり、友達の発表を聞いたりする場面が多く設定されています。しかし実際の教室では、発表が終わった後に「何か質問はありますか」とたずねても、なかなか手が挙がらないことがあります。特に中学1年生にとって、クラスメイトの発表を聞いて、その場で英語で質問することは簡単ではありません。「何を聞けばよいかわからない」「英語でどう言えばよいかわからない」という段階で止まってしまう生徒も少なくありません。

本稿では、NEW CROWN (以下、NC) 1 pp.100-101 Project 2「理想のロボット選手権」を例に、英語が苦手な生徒も単語や短いフレーズから参加し、少しずつ文で質問したり答えたりできるようにするための工夫を紹介します。

普段の授業で教科書本文を使って「やり取りの種」をまく

発表後のQ&Aを成立させるためには、本番の活動だけでなく、日頃の授業の中で短いやり取りを積み重ねておくことが大切です。私は、毎時間の導入や教科書本文に入る前の場面で、教科書の写真、挿絵、登場人物、題材を使って、簡単な質問を投げかけるようにしています。たとえば、写真や絵を見せながら、まずは「事実」を確認する質問をします。

例 What do you see? / What is this? / Who is this?

このような質問は、生徒が単語や短いフレーズで答えやすく、英語が苦手な生徒も参加しやすいものです。慣れてきたら、「個人の考え」や「理由」を問う質問へ広げます。

例 Is it useful? / Do you like it? / Why do you think so?

ここで大切にしているのは、教科書の内容を「読む」「理解する」だけで終わらず、そこから一言反応したり、理由を述べたりする場面を作ることです。さらに、余裕のある生徒には、教師の質問に答えるだけでなく、写真や本文の内容をもとに自分で質問を作ることにも挑戦させます。相手に何を聞けばよいかを考える経験が、発表後のQ&Aで聞き手として質問する力につながります。

マッピングで話す内容を見える化する

NC 1 Project 2「理想のロボット選手権」では、生徒が自分の理想のロボットを考え、その特徴を英語で紹介します。このとき、いきなり英語で発表文を書かせたり、発表後に質問させたりすると、

英語が苦手な生徒は止まってしまうやすくなります。そこで、まず筆者作成のワークシートを使って、自分のロボットについて簡単なマッピングを行います。中心にロボットの名前と絵を書き、その周りに「できること」「できないこと」「色や形」「値段」「どんなときに役立つか」「なぜ必要か」などを、単語や短いフレーズで書き出します。たとえば、友だちロボットを考えた生徒であれば、friend robot / listen to me / kind / blue / 500 yen / can't do homework などのメモが出てきます。この段階では、完全な英文でなくてもかまいません。単語や短いフレーズでも許容することで、生徒は自分のアイデアを出しやすくなります。

質問の視点を「事実」と「理由」に絞る

生徒が発表後に質問できない理由の一つは、質問の視点が多すぎることです。「何でも質問していいよ」と言われると、かえって何を聞けばよいかわからなくなります。そこで、1年生のうちは質問の視点を大きく二つに絞ります。一つめは、基本的な情報をたずねる「事実」の質問です。

例 What (else) can it do? / What color is it? / How much is it?

これらの質問は、ロボットの特徴を具体的にするために使いやすく、教科書のプロジェクトの条件を満たすことにもつながります。二つめは、「個人の考え」や「理由」を問う質問です。

例 Why do you need it? / Why is it useful? / Why is it blue?

理由をたずねることで、単なる情報の確認から一歩進み、発表者の考えに触れるやり取りになります。また、それらを基本的な疑問文の型としてプリントにしたり、黒板に掲示したりします。このように質問の型を見える形で示しておくことで、英語が苦手な生徒も、まずは黒板を見ながら質問することができます。

3人グループで発表後Q&Aを行う

発表後のQ&Aは、最初からクラス全体で行うと、生徒にとって心理的な負担が大きくなります。そこで、まずは3人グループで行います。1人が発表者、2人が聞き手となり、聞き手が質問します。活動の流れは、①発表者が自分のロボットを紹介する、②聞き手が質問する、③発表者が答える、④聞き手が反応する、⑤役割を交代する、というシンプルなものなのです。

このとき、聞き手の質問にも段階をつけます。まずは、What can it do? や How much is it? のように、プリントや黒板にある質問をそのまま使ってもよいことにします。ここでは、「自分で新し

い質問を作る」ことよりも、「相手に英語で質問できる」という経験を大切にします。少し慣れてきたら、相手の発表内容を受けて質問する型を使います。

例 You said, “friend robot.” What can it do?

You said, “blue.” Why is it blue?

この You said は、相手の発話を受けていることを示す簡単な表現です。さらに余裕がある生徒には、That’s nice. Why do you need it? や Interesting! What can it do? のように、短い反応を入れてから質問するよう促します。すべての生徒に同じレベルを求めるのではなく、まずは質問でできればよい、次に相手の言葉を受けられればよい、さらに反応を入れられればよい、という段階を用意しておくことが大切です。

やり取りを続けるための足場かけ

即興のやり取りでは、質問の文を知っているだけでは不十分です。相手の英語が聞き取れなかったり、自分が何を言えばよいかわからなくなったりすることがあります。そこで、Q&Aの前には、次のような聞き返しの表現も確認します。

例 Pardon? / One more time, please. / Slowly, please.

聞き取れないことは失敗ではなく、聞き返せばよいのだと伝えておくことで、生徒は安心して活動に参加しやすくなります。また、練習段階では、英語で何と言えればいいかわからない場合、日本語で言いたい内容を出してもよいことにしています。たとえば、次のようなやり取りがありました。

S1: This is my robot. He is a friend robot.
S2: You said “friend robot.” What can it do?
S1: It can listen to me kindly. And it can... 励ましてくれる。
S3: Oh, nice. Why?
S1: Because I am tired 放課後…after school.

このやり取りでは、S1は「励ましてくれる」という表現を英語で言うことができませんでした。しかし、ここで止めてしまうのではなく、活動後に全体で共有します。

T: 今のやり取りの中で、「言いたかったけれど英語で言えなかったこと」はありますか。
S1: 「励ましてくれる」って言いたかったです。
T: いいですね。クラスの中で「励ます」に近い英語を調べた人はいいますか。
Ss: cheer? cheer up?
T: そうですね。では、「私を励ます」ならどう言えそうですか。辞書に例文が載っているかな？
Ss: Cheer me up.
T: その通りです。だから、“It can cheer me up.” と言えますね。朝起こしてくれるロボットなら “It can wake me up.” とも言えます。

このように、生徒が言えなかった表現をその場で拾い、次に使える形で返すことで、やり取りが語彙の学びにもつながります。大切なのは、英語で言えなかったことを失敗として終わらせないことです。「言いたいことがある」「でも英語で言えない」という場面こそ、新しい表現を学ぶチャンスになります。

また、このような共有を行うと、同じ表現を必要としていた他の生徒にも役立ちます。一人のつまづきをクラス全体の学びに変えることができます。

Q&Aで整理した内容を、次の発信へつなげる

発表後のQ&Aは、その場のやり取りだけで終わるものではありません。友だちから質問されることで、生徒は自分のアイデアを整理したり、足りない情報に気づいたりします。たとえば、先ほどの生徒は、Q&Aを通して、I need it because I am tired after school. のように、自分のロボットが必要な理由を文で表すことができました。最初は friend robot や listen to me といった単語やフレーズのメモだったものが、友だちとのやり取りや教師の支援を通して、少しずつ文になっていきます。

つまり、発表後のQ&Aは、単なるおまけの活動ではありません。生徒が自分の考えを深め、表現を広げ、次の発信につなげるための重要な言語活動になります。

おわりに 3年間を見通したやり取りの指導へ

1年生では、まず「事実を聞く」「考えや理由を聞く」という二つの視点に絞り、質問の型を示しながら、安心してやり取りできる環境を作りました。しかし、そこから学年が上がるにつれて、このQ&Aの視点を少しずつ広げることができます。たとえば、2年生では理由に加えて、具体例や比較を求める質問を扱うことができます。

例 Can you give me an example? / Which do you like better? Why?

また、3年生では、活動の振り返りや改善、社会とのつながりに関わる質問へ広げることできます。

例 What was difficult? / What do you want to change next time? / How can your idea help other people?

このように、発表後のQ&Aを3年間で段階的に育てていくことで、教科書のプロジェクト活動を「発表して終わり」にせず、相手の考えを受けて伝え合う場へと変えることができます。

やり取りの力は、流ちょうに話せる生徒だけのものではありません。単語で答えること、聞き返すこと、友だちの言葉を受けて質問すること、日本語で出てきた思いを英語にしていこう。その一つ一つが、やり取りの力を育てる大切なステップです。単語から文へ、質問から対話へ。発表後のQ&Aを、日々の授業の中で無理なく育てていきたいと思います。

台東区立 上野中学校
島田 拓先生
(1年生担当)



◆中学校英語の入門期に気をつけた2つのこと

1つめは、小学校と中学校の学習がつながっていることを感じられるよう、単元のGoal Activityからbackward designで指導計画を考えることです。小学校でのタスク・シラバスによる学びを踏まえ、中学校でも毎回の授業が単元のGoalにつながっていることを生徒が実感できるようにしました。

2つめは、生徒の気づきや疑問を大切に授業を進めることです。音声中心の理解可能なインプットを多く与え、音と文字のつながりに少しずつ慣れさせます。教師が最初から説明するのではなく、発問やペア活動、ヒントを通して、生徒自身の気づきを促し、そこから学びが深まるようにしました。

— 授業紹介 —

授業開始

帯活動(フォニックス)

アルファベットの名前読みと音読みの練習をします。繰り返し練習し、英語の文字と音の関係に慣れさせます。

Scene 1

Scene 1 聞いてみよう

- ① Scene 1の挿絵を見せて、生徒とやり取りしながら場面を確認します。キャラクターの名前、何をしているか、場所、時間帯などを確認します。
- ② 場面を確認した後、「聞いてみよう」で提示されている選択肢の国旗、楽器、水族館と動物園の絵を見せながら、それらの英語の発音を確認します。必要に応じて生徒全体や個別に発音させます。
- ③ 1回めのリスニングでは概要を捉えることを意識するよう伝え、Scene 1の3つのアニメーションを通して見せます。その後、生徒とやり取りしながら「聞いてみよう」No.1～3の答えを確認します。
- ④ 「聞いてみよう」の答え以外で聞き取れたことを確認します。ここでは、教師が“I am Ms. Brown. I am from the U.K.”などと言ってキャラクターになりきり、できるだけターゲット文法(I am ... / I like ... / I play ...)を使いながら、生徒から聞き取れたことを引き出します。例えば“I am an English ...”で止めて、生徒から“teacher”を引き出します。生徒の反応が薄い場合は、“I am a student?”と言って生徒から“English teacher”を引き出します。studentの意味が分からないようであれば、教師が自分のことを指して“I am a teacher.”、生徒に対して“You are students.”のようして確認します。聞き取れなかった内容がある場合は、もう一度音声を聞かせて確認します。No.2とNo.3も同様に、生徒とのやり取りを通して聞き取れた内容を引き出したり、再度音声を聞いて確認したりします。
- ⑤ 最後にもう一度No.1～3の音声を聞かせて理解できるようになったかを確認します。

Scene 2

Scene 2 オーラルイントロダクション、内容理解

- ① 教科書を閉本させたままScene 2の挿絵を見せて、生徒とやり取りしながら英文が話されている場面を確認します。キャラクターの名前やしていること、場所や時間などを確認します。

- ・Who is this girl?
 - ・She is talking about her name, her favorite things, and her hobbies.
 - ・Where is she talking? / Is she talking in the gym? No. She is talking in her classroom.
 - ・When is she talking? / Is she talking in a math class? No. She is talking in an English class.
- ※wh-疑問文で生徒の反応がない場合は、Yes / No疑問文に切り替えます。



Lesson 1 指導計画

とびら(1時間)

単元のテーマ・目標・Goal Activityの確認

Part 1(3時間)

はじめての英語の授業

・本文の内容理解、ターゲット文法の学習、音読練習

・前時の復習、音読練習、リプロダクション

・パフォーマンステスト(音読テスト、自己紹介)

Part 2(2時間)

休み時間の教室

Part 3(2時間)

学校からの帰り道

Goal Activity(1時間)

・プロフィールカードの作成、カードを用いたやり取り

本時の授業

Book 1 Lesson 1 (1時間目)



② まだ教科書は閉本させたままで、Scene 2のアニメーションを見せます。キャラクターになりきって生徒とやり取りしながら、聞き取れた内容を確認します。ここでも小学校で学習しているターゲット文法 (I am ... / I like ... や I play ...) を使いながら、生徒から聞き取れた内容を引き出します。

・ I like ... / I like music and math? No, I like sports and English.
同様に I play ... / I watch ... / I read ...

③ 教科書を開本し、本文を黙読させます。中学校入学段階の生徒は、初見の文字や文章を読むことに慣れていないため、時間設定に気をつけて、少しずつ読むことに慣れさせます。

④ 新出語句・表現など、②で確認していない内容について、説明を行います。例えば、oftenについては、「たびたび、しばしば」という日本語だけでは理解が難しいため、My Dictionary p.21を活用し、既習のusuallyやsometimesと比較しながら確認します。

また、I am good at English. については、生徒がなじみのある表現を用いて I can speak English very well. などと言い換えて意味を確認します。

文法理解

ターゲット文法の理解

本文で使用されている英文を取り出して、ターゲット文法の理解を促します。英文同士、英語と日本語を比較しながら、生徒にターゲット文法の特徴について気づかせるようにします。

主語＋動詞～. の語順やbe動詞や一般動詞など文法的な説明を行う際には、それらを知っていることで、より正確に表現できたり、学習がしやすくなったりする点を確認します。

I am Tanaka Hana. (私は田中花です。)
I play soccer. (私はサッカーをします。)

発問：amを用いるときと、amを用いないときの違いは？
英語と日本語の順番は同じ？ 順番の違いは？

新出語句の確認・発音練習、Scene 2 本文の音読練習

① 新出語句や表現の意味を確認し、発音練習をします。生徒の状況に応じて、個別に発音させてチェックを行います。

② 音と文字の関係に注意を向けさせるために本文を映したスクリーンや教科書を見せながら、本文の音声を2～3回聞かせます。その後、choral reading、overlapping、buzz reading、read & look-upを行います。このときも、注意させたい発音については個別にチェックを行います。次回の授業で本文を活用して自己紹介を行うことを伝え、be動詞 (am) や一般動詞を含む英文を言えるようにします。

授業終了

授業を終えて

Part 1の2時間めのリプロダクション、3時間めの自己紹介では多くの生徒が本文を活用して自分のことを表現できている一方で、amと一般動詞を混用する生徒もいました。amと一般動詞を使い分けられるようになるには時間がかかるため、今後も言語活動を通して繰り返し定着を図る必要があると、改めて認識しました。また、For Self-study 2の辞書指導を機会に品詞について確認し、be動詞 / 一般動詞と一緒に用いる品詞やコロケーションにも意識を向けさせながら、生徒が英語で表現できることを増やせるよう指導していきます。

生徒のニーズを活かす英語授業③ Impromptu Speech Cardsを 用いた実践

日臺 滋之 Hidai Shigeyuki (拓殖大学)

学習者のニーズを支援する語彙指導

Nation (2008) は、「語彙指導で効果があるのは、学習者が支援を最も必要とするときに手を差し伸べることができることであり、四技能を伴う『意味の伝達に焦点を当てた活動 (meaning-focused activities)』の文脈において、学習者がその活動に必要な語彙項目を扱うことで、指導の効果が高まる」と述べています。

本稿では、活動を工夫し、表現や語句の定着を支援できる実践を紹介します。

Impromptu Speech Cardsを用いて

学習した表現や文法事項の定着を図るために授業でペアでのやり取りを行っていても、一度実施したからといってそれがすぐに定着するわけではありません。すでに授業で実施したやり取りのトピックや、NEW CROWNのLesson内で扱ったSmall Talkの中から、生徒の興味や関心を引きそうなものや、くり返させたいテーマを拾い出し、記載したカードを作成します（例えば1年生であれば、“Please tell me about your favorite place.”や“What is your favorite subject?”など）。

二人一組になり、話し手がカードをめくり、そこに書いてあるお題について1分間話します。以前ペアでやり取りした語彙や表現、文法事項をもう一度思い起こし、即興でスピーチを試みるという活動です。このカードをImpromptu Speech Cards

と呼びます。

Impromptu Speech Cardsの指導例

- ①二人一組になり、各ペアにトピックが見えないようにしてカードの束を配ります。
- ②順番を決め、先行の生徒がカードを取り、書いてあるトピックを確認します。このとき、そのトピックについて話すのが難しければ、“Pass.”と言って次のカードを取ることができます。ただし“Pass.”は一度のみです。
- ③話す内容について考える時間を30秒間与えます。教師の“Please talk to your partner.”の合図で1分間話し続けます。スピーチをする生徒は、活動後に自身の英語をふり返るために端末に録音します。聞き手には、内容が理解できれば相づちなど、リアクションをするように指示します。
- ④1分後、教師の“Stop talking.”の合図で、話し手と聞き手が入れ替わります。
- ⑤2回目以降は、相手を変えて行るか、同じ相手に言い足りなかったことを追加して、再度チャレンジします。
- ⑥ふり返りシートを配布し、生徒は英語で言いたかった表現を日本語で書き、提出します。

活動後の語彙指導

活動後は、回収した英語で言いたかった表現をALTと英訳し、日本語とその英訳とを一対一対応させ、後日BingoやFlash cards、またはリストにしたものを

配布し、生徒にフィードバックします。この支援を通して生徒は自分が必要とする表現が示されるので、次回はその表現を使うようになることが期待できます。実際に生徒のスピーチをモニターしていると、生徒がその表現を使用している場面に会うことがあり、語彙指導の効果を実感します。

「話すこと[発表]」の評価に利用

実施済みのやり取りのトピックが10個ほどあれば、Impromptu Speech Cardsの活動ができます。生徒が10枚のカードから1枚をめくり、そのお題について1分間でALTに即興で話すテストを行うと、「話すこと[発表]」の評価に活用できます。

活動を複数回行ったあと、テストの予告を1週間前などに行い、各トピックについて、自分の言いたかった表現を練習するように伝えます。ペアでのやり取り→Impromptu Speech Cardsの活動→テスト1週間前の予告→Speaking testという流れができ、波及効果で生徒は授業中のペアワークにも意欲的に取り組むようになります。

Impromptu Speech Cardsの手法は、ペアでのやり取りを即興的なスピーチ活動にも変えることができます。学年が上がるとカードの枚数も増え、学習した表現や語句もくり返され、定着が期待できます。話す時間も、1分30秒、2分と段階的に延ばしていくとよいでしょう。



David Allen (Ochanomizu University)

What do these three words have in common: *theme*, *coffee*, and *bus*? They are all *loanwords* (*gairaigo*) in Japanese. They are borrowed from German, Dutch, and English, respectively. Although we call them borrowed words, they are never given back!

Loanwords make up an important part of the lexicon in many languages. In English, for example, approximately one in every three headwords in the Oxford English Dictionary is borrowed, mainly from Latin and French (like *bus*, for example).

In Japanese, thousands of loanwords exist, and most are borrowed from English. Of the most common 10,000 words in English, approximately one in every four words has a commonly understood loanword in Japanese. When considering academic words, this proportion grows to one in three. This leads us to wonder, how useful are loanwords for language learning?

From studies in psychology, we know that English words that have loanwords in Japanese provide an advantage: they are both read and spoken faster than words without a loanword equivalent. However, this 'cognate effect' amounts to less than one-tenth of a second, which makes it essentially

imperceptible in real life.

From studies in applied linguistics, we know that words with similar sounding equivalents across languages are more easily remembered. This means that making form-meaning connections for new words is easier for English words that have similar-sounding loanwords in Japanese.

Another benefit is found in lexical inferencing, which is when we guess, or infer, the meaning of unknown words. When English words have similar-sounding words in Japanese, this knowledge can help learners to infer the meaning of unknown English words. If learners try to pronounce the word, it may help them infer meaning, especially if they make use of other clues such as those provided in the sentence context.

Finally, I have observed Japanese teachers refer to loanwords when they are helping learners to understand words or texts. They guide learners to notice similarities and differences in the form, meaning and use of words in English and Japanese. In this way, they help their learners not only to notice cross-linguistic similarities but also to make use of their full range of linguistic knowledge.



リクツで納得! 学校英文法の「文法」 亘理 陽一 (北海道大学)

自他をつなぐ補充法



るくに授業を聞かず、英和辞書の不規則動詞の活用表を眺めては何らかの法則性を見出そうとしていた私が、補充法 (suppletion) という概念を知ったのは大学院生になってからだった。補充法とは、過去形や比較級などで元の単語とは語源の異なる形が使用される言語現象のことで、ate や had、taught といった、不規則変化ではあるが、原形との音声的類似を残しているものは「弱 (weak) 補充」と呼ばれ、動詞の went や was は「強 (strong) 補充」に分類される。つまり、go と went の関係は、もともと違う動詞の過去形であった went が go の過去形として使われるようになったという経緯に過ぎず、両者の間に何らかの法則性を探し求めても徒労に終わる。be とその変化形に至っては4つの単語が集まったもので、それぞれを覚えるより他ない (詳しく知りたい人は、唐澤一友ほか『英語語源ハンドブック』研究社、2025年を参照されたい)。

「覚えるより他ない」などと、この連載では禁句とも言える表現に不安になったかもしれないが、安心して欲しい。補充法の考え方が文法のリクツとして役に立つことがある。例えば、「使役」と言うと let や make の構文がイメージされると思うが、それに限らず、原因と結果の因果関係を表すものを広く使役構文 (causatives) と呼び、「Yoichi broke the vase.」のような文は「語彙的使役構文」に分

類される (Payne, T. E. (2011). *Understanding English grammar*. Cambridge University Press. p. 318). Yoichi caused the vase to break (陽一を原因として、花瓶が壊れるという結果が引き起こされた) という因果関係を表しているからである。一方、同じ break を用いて、「The vase broke.」のように結果のみを提示し、原因と結果の関係 (使役) を表さない文も作れる。

動詞の中には、語彙的使役と非使役について、raise/rise、lay/lie、set/sit のように弱補充の関係を示すペアがある。例えば、他動詞 raise を用いた「Yoichi raised money for the repair.」は、自動詞 rise を用いた「Money rose for the repairs.」に対応する。過去形は不規則変化でややこしい動詞たちだが、原形を見ると、いずれも他動詞には /e/ の音が入っているという共通点を見つけることもできる。さらに、音声的につながりのない「kill/die」や「show/see」、「feed/eat」といったペアにも、例えば「The update killed the battery.」と「The battery died.」といった具合に同じ関係を見出すことができ、強補充の関係をみなせる。

一方 break や open は、語彙的使役と非使役を同じ形で表現することができる、いわゆる自他交替をする動詞群に属する。つまり、ある程度の語彙の知識は必要になるが、学習者を悩ませる自動詞・

他動詞の理解を、(特に弱) 補充法という概念によって仲立ちできるかもしれない。知っている動詞の中に弱補充・強補充の関係を探したり、語彙的使役と非使役の言い換えを考え出したりしたらめたものだと思うのだが、どうだろうか。

これを踏まえて、自動詞と他動詞、あるいは語彙的使役と非使役の味を感じられる Snow Patrol の「Chasing Cars」を聴いてみよう。後半に let を用いた使役で「Let's waste time, chasing cars around our heads.」(頭の上をグルグル回る車を追いかけてながら、時間を無駄にしよう) と誘うこの曲の歌い手は、仮定法過去が紛らわしいものの、「If I just lay here, would you lie with me and just forget the world?」(ここに横になったら、あなたと一緒に横になって、世間のことを忘れてくれる?) と弱補充の非使役で聞き手に誘いかける。「Show me a garden that's bursting into life」(生き生きと息づく庭を私に見せて) というのは、横になって耽っている空想か、はたまた抽象的な愛の告白か。横になっていると、相手の瞳の中に、自分の全て、そして今までの自分が見える(「they're all I can see.」)。

私も世間を忘れてそういう時間を補充したい。生徒は私より強くそう思っているかもしれない。リクツとともに補充してあげてほしい。

Q&A

Question

「書くこと」の活動では、モデル文をなぞる活動になりがちで、生徒の考えや工夫が見えないことがあります。生徒自身のことばで書けるようにするには、どのような支援をすればよいでしょうか。

Q



A

Answer

言語面よりも、まず内容面の支援から始めるとよいでしょう。読み手が誰なのか、伝える目的は何かを意識させ、書き手の気持ちを育ててからモデル文を示すのが、より効果的です。



今井 裕之 (関西大学)

AI活用からモデル文の使い方を考える

「書くこと」の指導におけるAIの活用方法が最近盛んに研究されていますが、モデル文の使い方を考える上で参考になります。生徒たちが、「AIや機械翻訳で日本語を英語に翻訳すれば、英語を書けなくても大丈夫」と、AIに自分の「肩代わり」をさせてしまうのは、AI利用のマイナス面です。一方で、伝えたい内容がある程度英語で書いてみて、それを修正する過程でAIを活用するなど、AIに「伴走」してもらい方はプラス面と言えます。

モデル文を示すタイミング

モデル文をなぞらせる指導方法は、AIに文章作成を「肩代わり」させる使い方に似ています。自分の英語力を超えた英文(モデル文)を用い、自分の伝えたい内容を部分的に書き換えるような、モデル文に「肩代わり」させる文章作成では、その英文は生徒自身の言葉にはなりえません。教師としても、生徒が書いた結果を見るだけでは、迷ったり工夫したりした過程が見えないことから、モデル文を最初に提示する指導方法はおすすめできません。

では、モデル文に「伴走」してもらおうプラスの使い方とは、どのような指導手順でしょう

か。まず、①伝えたい内容や伝える順序(構成)を考えます。次に、②自分の表現力で書ける英語を用いて、短くてよいので書いてみます。その後、③教師がモデル文を提示し、自分の書いた文章と比較・参照させます。その違いを先生や級友、必要に応じてAIとのやり取りを通して気づかせ、④各自が再度書き直すことで、加筆修正した英文が自分の言葉になっていくように思います。このように、思考・学習のプロセスを教師が主導しながら生徒たちに体験させることで、生徒たちが「伝えたいことを書けないもどかしさ」「問題点への気づき」「改善方法の学び」「自分の表現に取り込む」プロセスを共同体験できるのではないのでしょうか。

一方で、「最初にモデル文を示さないと、何をどんな順序で書くのかを理解させることは難しい」「モデル文がないと書けない」といった過去の指導経験に基づく信念もあり、一度書いた後でモデル文を示すことへの抵抗があるかもしれません。モデル文をまず提示してから英文を書かせる場合でも、なぜ、何を、どのように書くのかを、モデル文を提示する前に考えさせることが大切だと思います。

読み手と目的を意識させる

モデル文を提示することで言語面の支援をする前に、内容面の支援を通して「書きたい内容が定まらない」状態を脱して、「書きたい内容はあるけれど、どう表現・構成したらよいかわからない」段階にたどり着かせておくことが重要です。

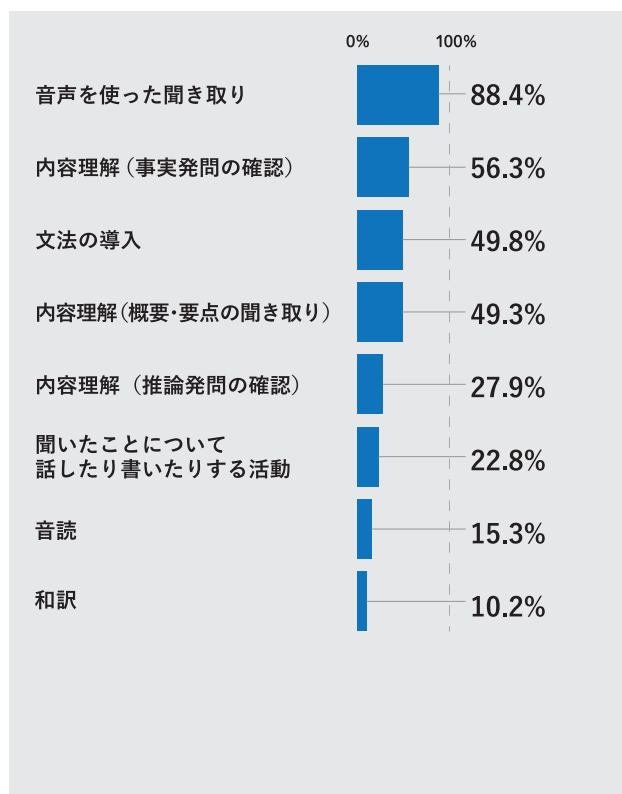
伝える内容面の支援をして、モデル文を活用できる状態にたどり着かせるには、まず、①読み手が誰で何を望んでいるかを考えさせます。次に、②伝える目的を確認します。例えば、意見を言う、理由を述べる、賛成・反対する、苦情を言うなど、「書くことによって何を達成したいのか」を明確に意識させます。そうすることで、モデル文が提示された時に、生徒自身が「読み手」となって、積極的・批判的にモデル文を読む視点を持つことができ、自分の書く文章に活用できるのではないかと思います。

モデル文は(AIと同様に)自分の書きたいことを「肩代わり」してくれるものではなく、考えて書くプロセスに「伴走」してくれる存在として活用させましょう。そのために手間はかかっても、誰に向けて、何をするために書くかの意識づけが第一です。

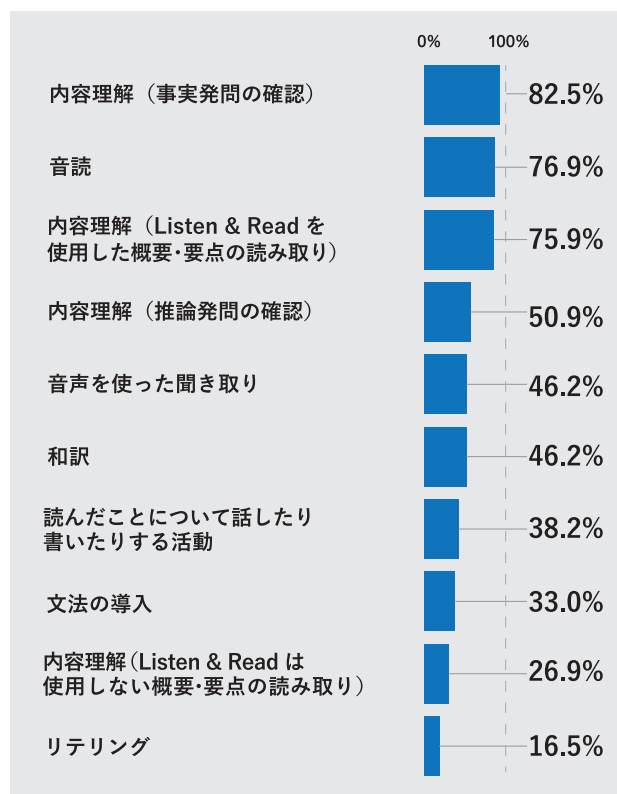
令和7年度版 NEW CROWN アンケート結果のお知らせ

2026年1～3月に、現在 NEW CROWN をご使用いただいている学校を対象に教科書についてのアンケートを実施いたしました。ここに、その結果の一部をご報告させていただきます。
長大なアンケートにご回答いただきました先生方に、この場を借りてお礼申し上げます。

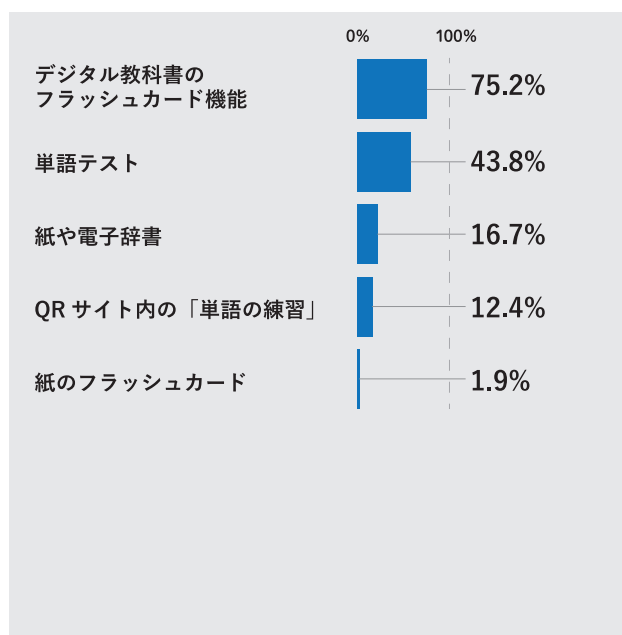
Scene 1 の使用方法



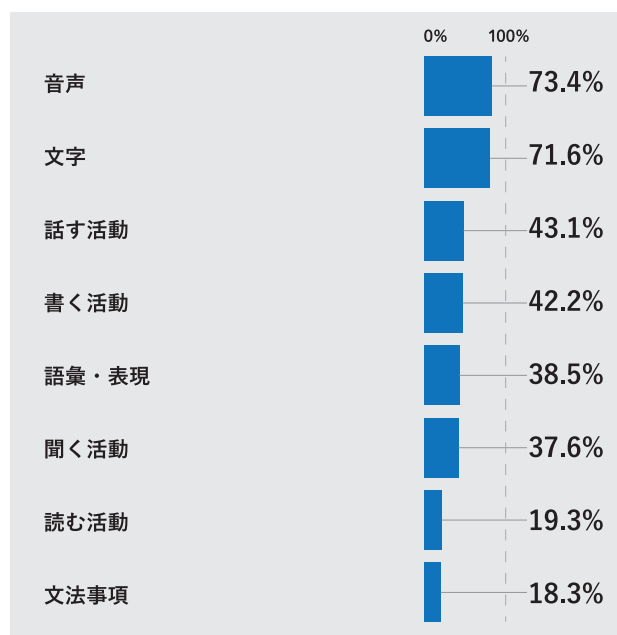
Scene 2 の使用方法



語彙指導の際に使用しているもの



小中接続期にていねいに扱った方がよいと感じたもの



「読むこと」の授業が変わる。実践から学ぶ指導改善の提案



酒井英樹・津久井貴之・佐藤大樹〔編著〕
B5判 208頁 2,530円(税込)
ISBN 978-4-385-36601-2

中学校英語「読むこと」の「思考力、判断力、表現力等」の指導 3つの読み方が身につく授業のポイント

学習指導要領では、「必要な情報を読み取ること」「概要を捉えること」「要点を捉えること」といった資質・能力の育成が求められていますが、実際の授業では、どのような教材で、どのような手立てを用い、何を評価すればよいのかに悩む場面も少なくありません。

本書は、そうした課題に応えるべく、「どのような力を育成するのか」「どのように指導するのか」「どのように評価するのか」を丁寧に整理したうえで、豊富な実践事例を提示します。

実践編では、「必要な情報」「概要」「要点」を捉える指導について、説明文や物語文の読みを支える具体的な方法を紹介します。

小中高連携や国語科とのつながりにも目を向け、中学校英語の「読むこと」の授業を見直すための確かな視座を示します。

書籍の目次・ためし読みはコチラ》



ことまな学校サポートサイトのご案内

Teacher's Manual付属の各種データに加えて、指導や評価に活用できるさまざまなデータを提供しています。

また、授業にお使いいただける補充データを逐次追加しております。ぜひ、ご活用ください！

●補充指導資料

- 評価事例 学期ごとの評価を支援する、テスト例やふり返しシートです。
- 教科書対応Googleフォーム レッスンごとの学習事項が確認できるGoogleフォームです。
- 資料映像のスクリプト デジタル教科書(教材)やQRサイトで提供する資料映像のスクリプトです。
- Lesson 1ワークシート(be動詞・一般動詞) 1年Lesson 1の導入を支援するワークシートです。
- フレーズリーディング用スライド 各学年の本文をフレーズリーディング用に編集したパワーポイントです。
- Scene 1活用ワークシート 各レッスンのScene 1の活用を支援するワークシートです。
- 基本動詞のフラッシュカード 基本動詞と、その動作を表すイラストをセットにしたフラッシュカードです。
- デジタル教科書・教材使い方ガイド 基本機能や各コンテンツを使いこなすためのマニュアルです。



アクセスはこちらから

●<https://www.sanseido.jp/support/login>



「ことまな学校サポートサイト」は、令和7年度版『NEW CROWN』のTeacher's Manualをご採用いただいている学校ごとの専用サイトです。ご利用には、Teacher's Manualの購入および登録が必要です。



三省堂 小・中学校 教科書
LINE 公式アカウント
はじめました！

授業のお役立ち情報を
定期的に配信中！



三省堂

〒102-8371 東京都千代田区麹町5-7-2

三省堂 教科書・教材サイト <https://tb.sanseido.co.jp/>

※この冊子は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って配布しております。